

演習問題解答

1 電波伝搬の基礎

1.1

$$r + \Delta r = \sqrt{(r')^2 + \left(\frac{D}{2}\right)^2} = r' \left\{ 1 + \left(\frac{D}{2r'}\right)^2 \right\}^{1/2} \quad (\text{A1.1})$$

$$\cong r' \left(1 + \frac{1}{2} \left(\frac{D}{2r'}\right)^2 \right) = r' + \frac{D^2}{8r'}$$

$$\therefore \Delta r = \frac{D^2}{8r'} \quad (\text{A1.2})$$

この Δr の距離が $\pi/8$ の位相差を与えるから、

$$\frac{2\pi D^2}{\lambda 8r'} = \frac{\pi}{8} \quad (\text{A1.3})$$

と書ける。これを解いて、

$$r' = \frac{2D^2}{\lambda} \quad (\text{A1.4})$$

を得る。

1.2 自由空間伝搬損失は $\left(\frac{4\pi d}{\lambda}\right)^2 = \left(\frac{4\pi df}{c}\right)^2$ で与えられる。

(a), (b), (c) それぞれの自由空間伝搬損失 (dB) を L_a, L_b, L_c とする。

$$(a) \quad L_a \cong 10 \log \left(\frac{4 \times 3 \times 10 \times 2.5 \times 10^9}{3 \times 10^8} \right)^2 = 20 \log 10^3 = 60 \text{ dB} \quad (\text{A1.5})$$

$$(b) \quad L_b \cong 10 \log \left(\frac{4 \times 3 \times 10^3 \times 800 \times 10^6}{3 \times 10^8} \right)^2 = 20 \log (2^5 \times 10^3) \\ = 20(5 \log 2 + 3 \log 10) \cong 20(1.5 + 3) = 90 \text{ dB} \quad (\text{A1.6})$$

$$(c) \quad L_c \cong 10 \log \left(\frac{4 \times 3 \times 4 \times 10^7 \times 10 \times 10^9}{3 \times 10^8} \right)^2 = 20 \log (2^4 \times 10^9) \\ = 20(4 \log 2 + 9 \log 10) \cong 20(1.2 + 9) = 204 \text{ dB} \quad (\text{A1.7})$$

1.3 屈折率 n はこの場合以下のように表される。

$$n = \frac{n_2}{n_1} = \frac{\sqrt{\frac{(\varepsilon_2 - j\sigma_2/\omega)/\mu_2}{\varepsilon_0\mu_0}}}{\sqrt{\frac{(\varepsilon_1 - j\sigma_1/\omega)/\mu_1}{\varepsilon_0\mu_0}}} \quad (\text{A1.8})$$

$$(\mu_1 = \mu_2 = \mu_0, \text{ および } \sigma_1 \ll 1, \sigma_2 \ll 1)$$

ここで、空中から比誘電率 9 のコンクリート壁面への電波の入射を考えると、 $\varepsilon_2 = 9\varepsilon_0$ 、 $\varepsilon_1 \cong \varepsilon_0$ であるから、 $n \cong 3$ である。これを式 (1.45) に代入して (式 (1.47) でも同じ結果が得られる) 、

$$R = \frac{1-3}{1+3} = -\frac{1}{2} \quad (\text{A1.9})$$

である。反射係数は振幅次元の値であるから、デシベルを計算するには $20 \log$ をとる。したがって、反射係数の絶対値のデシベル値を R_{dB} とすると、

$$R_{dB} = 20 \log \left| -\frac{1}{2} \right| = -20 \log 2 = -6 \text{ dB} \quad (\text{A1.10})$$

1.4 \mathbf{E}_0 は単位距離における電界、 \mathbf{E}_1 は距離 r_1 に置ける電界であることを考えると、 \mathbf{E}_1 は \mathbf{E}_0 に比べて振幅が $1/r_1$ となり、位相が $k(r_1 - 1)$ だけ変化する。したがって、

$$\mathbf{E}_1 = \frac{e^{-jk(r_1-1)}}{r_1} \mathbf{E}_0 \quad (\text{A1.11})$$

と書ける。 \mathbf{E}_2 も同様に表されるが、地面反射係数 R を考慮して、

$$\mathbf{E}_2 = \frac{R e^{-jk(r_2-1)}}{r_2} \mathbf{E}_0 \quad (\text{A1.12})$$

となる。これを $\frac{|\mathbf{E}|^2}{|\mathbf{E}_1|^2} = \frac{|\mathbf{E}_1 + \mathbf{E}_2|^2}{|\mathbf{E}_1|^2}$ に代入して、

$$\begin{aligned} \frac{|\mathbf{E}|^2}{|\mathbf{E}_1|^2} &= \frac{|\mathbf{E}_1 + \mathbf{E}_2|^2}{|\mathbf{E}_1|^2} = \frac{\left| \left(\frac{e^{-jk(r_1-1)}}{r_1} + R \frac{e^{-jk(r_2-1)}}{r_2} \right) \mathbf{E}_0 \right|^2}{\left| \frac{e^{-jk(r_1-1)}}{r_1} \mathbf{E}_0 \right|^2} \\ &= \frac{|\mathbf{E}_0|^2 \left| \frac{e^{-jk(r_1-1)}}{r_1} - \frac{e^{-jk(r_2-1)}}{r_2} \right|^2}{|\mathbf{E}_0|^2 \frac{|e^{-jk(r_1-1)}|^2}{r_1}} \quad (\because R \cong -1) \\ &\cong |e^{-jk(r_1-1)} - e^{-jk(r_2-1)}|^2 \quad (\because r_1 \cong r_2) \\ &= |e^{-jk(r_1-1)}|^2 |1 - e^{-jk(r_2-r_1)}|^2 \\ &= |1 - e^{-jk(r_2-r_1)}| \end{aligned} \quad (\text{A1.13})$$

となる。ここで、

$$\begin{aligned} r_2 - r_1 &= \sqrt{d^2 + (h_T + h_R)^2} - \sqrt{d^2 + (h_T - h_R)^2} \\ &\cong d \left(1 + \frac{(h_T + h_R)^2}{2d^2} \right) - d \left(1 + \frac{(h_T - h_R)^2}{2d^2} \right) = \frac{2h_T h_R}{d} \end{aligned} \quad (\text{A1.14})$$

$$\begin{aligned}
\therefore \frac{|\mathbf{E}|^2}{|\mathbf{E}_1|^2} &\cong |1 - e^{-2jk \frac{h_T h_R}{d}}|^2 \\
&= \left\{ 1 - \cos \left(\frac{2kh_T h_R}{d} \right) \right\}^2 + \sin^2 \left(\frac{2kh_T h_R}{d} \right) \\
&= 2 \left\{ 1 - \cos \left(\frac{2kh_T h_R}{d} \right) \right\}
\end{aligned} \tag{A1.15}$$

1.5 第 n フレネルゾーン半径を r_n とする. 式 (1.59) を用いて,

$$\frac{n\lambda}{2} = \frac{r_n^2}{2} \left(\frac{1}{d_1} + \frac{1}{d_2} \right) \quad \therefore r_n = \sqrt{\frac{d_1 d_2 n \lambda}{d_1 + d_2}}$$

$\lambda = \frac{3 \times 10^8}{3 \times 10^9} = 0.1 \text{ m}$, $d_1 = d_2 = 1000/2 = 500 \text{ m}$ であるから,

$$r_n = \sqrt{\frac{500 \times 500 \times n \times 0.1}{500 + 500}} = 5\sqrt{n} \tag{A1.16}$$

を得る. したがって,

$$n = 1, \quad r_1 = 5 \text{ m} \tag{A1.17}$$

$$n = 2, \quad r_2 = 5\sqrt{2} \cong 7.07 \text{ m} \tag{A1.18}$$

$$n = 3, \quad r_3 = 5\sqrt{3} \cong 8.66 \text{ m} \tag{A1.19}$$

$$n = 4, \quad r_4 = 10 \text{ m} \tag{A1.20}$$

である.

2 電離層伝搬

2.1 式 (2.9) より,

$$\begin{aligned}
f_N &= \sqrt{\frac{(1.605 \times 10^{-19}) \times (2 \times 19^{11})}{4 \times 3.14159^2 \times 8.854 \times 10^{-12} \times 9.109 \times 10^{-31}}} \\
&= \sqrt{80.88 \times 2 \times 10^{11}} \\
&\cong 9 \times 0.447 \times 10^6 \\
&\cong 4.03 \text{ MHz}
\end{aligned} \tag{A2.1}$$

となる.

2.2 見かけの高さは, 式 (2.10) より,

$$h' = \frac{3 \times 10^8 \times 10^{-3}}{2} = 150 \text{ km} \tag{A2.2}$$

である. また電子密度は, 式 (2.9) より,

$$N_e = \frac{(5 \times 10^6)^2}{9^2} = 3.1 \times 10^{11} \text{ m}^{-3} \tag{A2.3}$$

と求まる.

2.3 図 2.4 において伝搬路を微小線素 ds に分割すると, そこを通過するのに要する時間は $dt = ds/v = ds/(cn)$ で与えられる. また, 電波の入射角を θ とすると, $ds = dx/\sin \theta$ である. ただし, x は地上での水平距離である. したがって, 往路 TP に要する時間 t は, P 点の地上点 (TR の中点) を Q とすると,

$$t = \int_0^s \frac{ds}{v} = \int_0^Q \frac{dx}{cn \sin \theta} \quad (\text{A2.4})$$

となる. ここで, スネルの法則より, $n \sin \theta = \sin \phi$ であるから,

$$t = \int_0^Q \frac{dx}{c \sin \phi} = \frac{TQ}{c \sin \phi} = \frac{TP}{c} \quad (\text{A2.5})$$

となる. よって, これは光速で曲線 TP を進むのに要する時間に等しいことが分かる.

2.4 式 (2.19) より, $\theta = 60^\circ$ のときは,

$$\text{MUF} : f_M = 9 / \cos 60^\circ = 18 \text{ MHz} \quad (\text{A2.6})$$

$$\text{FOT} : f_M \times 0.85 = 15.3 \text{ MHz} \quad (\text{A2.7})$$

である. 同様に, $\theta = 45^\circ$ のときは,

$$\text{MUF} : f_M = 9 / \cos 45^\circ = 12.7 \text{ MHz} \quad (\text{A2.8})$$

$$\text{FOT} : f_M \times 0.85 = 10.8 \text{ MHz} \quad (\text{A2.9})$$

である.

3 対流圏伝搬

3.1 式 (3.1) より, 屈折率は

$$n = 1 + \left(\frac{77.6}{300} \times 1000 \times 10^{-6} + \frac{0.373}{300^2} \times 10 \right) \cong 1.000300 \quad (\text{A3.1})$$

である. 屈折指数は, 式 (3.2) より,

$$N = (1.000300 - 1) \times 10^6 = 300 \text{ NU} \quad (\text{A3.2})$$

である.

3.2 式 (3.2) より, $h = 0.5 \text{ km}$ であるから, 屈折指数は

$$N = 289 \times e^{-0.138 \times 0.5} \cong 270 \text{ NU} \quad (\text{A3.3})$$

である。また、式(3.15)'より、修正屈折指数は

$$M = 289 + 118 \times 0.5 = 348 \text{ MU} \quad (\text{A3.4})$$

となる。

3.3 式(3.19)より、

$$m = n_0 + \frac{h}{k \cdot a} \quad (\text{A3.5})$$

である。この式を h について表すと、

$$h = k \cdot a(m - n_0) \quad \therefore \frac{dh}{dn} = k \cdot a \quad (\text{A3.6})$$

となる。

3.4 式(3.22)より、降雨強度 $R = 10 \text{ mm/h}$ のとき、

$$A = 0.072 \times 10^{1.08} \times 5 \doteq 4.3 \text{ dB} \quad (\text{A3.7})$$

である。同様に、降雨強度 $R = 50 \text{ mm/h}$ のとき、

$$A = 0.072 \times 50^{1.08} \times 5 \doteq 24.6 \text{ dB} \quad (\text{A3.8})$$

となる。

4 移動伝搬

4.1 伝搬損失の距離特性が $40 \log d + C$ [dB] で表されるので、距離が d から d' に変わったときの伝搬損失差 ΔL は次式となる。

$$\Delta L = 40 \log d' - 40 \log d = 40 \log \frac{d'}{d} = 40 \log \frac{d'}{100} = 10 \text{ dB} \quad (\text{A4.1})$$

$$\log \frac{d'}{100} = \frac{10}{40} = \frac{1}{4} \quad (\text{A4.2})$$

$$10^{\log \frac{d'}{100}} = 10^{\frac{1}{4}} \quad (\text{A4.3})$$

$$\frac{d'}{100} = 10^{\frac{1}{4}} \cong 1.8 \quad (\text{A4.4})$$

これから、 $d' = 180 \text{ m}$ となる。

また、 $d = 1 \text{ km}$ のときは、同様に 1.8 km となる。

4.2 4.1.3 節から変動の周期は $\lambda/2$ である。周波数 2 GHz の波長は 0.15 m なので、受信レベルが落ち込む間隔は $0.075 \text{ m} = 7.5 \text{ cm}$ である。

4.3 式(4.20)から次のように求められる.

$$K = \frac{20}{1} = 20 \quad (\text{A4.5})$$

また, dB で表すと次のようになる.

$$10 \log K = 13 \text{ dB} \quad (\text{A4.6})$$

4.4 式(4.22)は次式である.

$$L = 69.55 + 26.16 \log f - 13.82 \log h_b - a(h_m) + (44.9 - 6.55 \log h_b) \cdot \log d \quad (\text{A4.7})$$

これに値を代入すると次式になる.

$$130 = 69.55 + 26.16 \log(1000) - 13.82 \log(50) + (44.9 - 6.55 \log(50)) \cdot \log d \quad (\text{A4.8})$$

$$130 = 69.55 + 78.5 - 23.5 + 33.8 \log d \quad (\text{A4.9})$$

これから, $5.5 = 33.8 \log d$ となり, $d = 1.5 \text{ km}$ となる.

4.5 1波の受信電力を P_0 とすると, 式(4.44)から平均遅延 τ は次のように求められる.

$$\tau = \frac{\int_0^{\infty} P(t) \cdot t dt}{\int_0^{\infty} P(t) dt} = \frac{P_0 \Delta t + P_0 2 \Delta t}{3 P_0} = \Delta t \quad (\text{A4.10})$$

また, 式(4.43)から遅延スプレッド S は次のように求められる.

$$\begin{aligned} S &= \sqrt{\frac{\int_0^{\infty} P(t) \cdot (t - \tau)^2 dt}{\int_0^{\infty} P(t) dt}} \\ &= \sqrt{\frac{P_0 \tau^2 + P_0 (\Delta t - \tau)^2 + P_0 (2 \Delta t - \tau)^2}{3 P_0}} \\ &= \sqrt{\frac{P_0 (\Delta t)^2 + P_0 (\Delta t - \Delta t)^2 + P_0 (2 \Delta t - \Delta t)^2}{3 P_0}} \\ &= \sqrt{\frac{P_0 (\Delta t)^2 + P_0 (\Delta t)^2}{3 P_0}} = \sqrt{\frac{2}{3}} \Delta t \end{aligned} \quad (\text{A4.11})$$

5 伝搬関連の技術

5.1 式(5.13)から次のように求められる.

$$\rho(\Delta d) = \cos(k\Delta d) = \cos(2\pi\Delta d/\lambda) = 0.4 \quad (\text{A5.1})$$

$$\cos^{-1}(0.4) = 1.16 \quad (\text{A5.2})$$

これから間隔 Δd は 0.18λ となる.

5.2 選択ダイバーシチのときの CNR は次式から求められる.

$$\text{CNR} = \frac{V_1^2}{N_0} = \frac{1}{0.2} = 5 \quad (\text{A5.3})$$

等利得合成ダイバーシチのときの CNR は次式から求められる.

$$\text{CNR} = \frac{(V_1 + V_2)^2}{2N_0} = \frac{1.5^2}{0.4} = 5.6 \quad (\text{A5.4})$$

最大比合成ダイバーシチのときの CNR は次式から求められる.

$$\text{CNR} = \frac{V_1^2 + V_2^2}{N_0} = \frac{1 + 0.5^2}{0.2} = 6.3 \quad (\text{A5.5})$$

5.3 元の伝搬路特性は A なので, 次式から得られる.

$$\begin{aligned} A &= \begin{bmatrix} -1 & -1 \\ -1 & +1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} 3 & 0 \\ 0 & 1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} -1 & -1 \\ -1 & +1 \end{bmatrix} \\ &= \begin{bmatrix} -3 & -1 \\ -1 & +1 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} -1 & -1 \\ -1 & +1 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 4 & 2 \\ 2 & 4 \end{bmatrix} \end{aligned} \quad (\text{A5.6})$$

5.4 レイトレーシング法の方が計算時間や計算量は少なく済むため, 屋外などの広い範囲を対象にできる. 一方, FDTD 法は空間を厳密に計算するためシミュレーション精度が高く, 屋内などの限られた場所に適用できる.

5.5 式(5.28)から次のように求められる.

$$g = (a + b - c + d - e) - f = (30 + 15 - 0 + 0 - 6) - (-110) = 149 \text{ dB} \quad (\text{A5.7})$$

ただし, ケーブル損失を 0 dB とした.